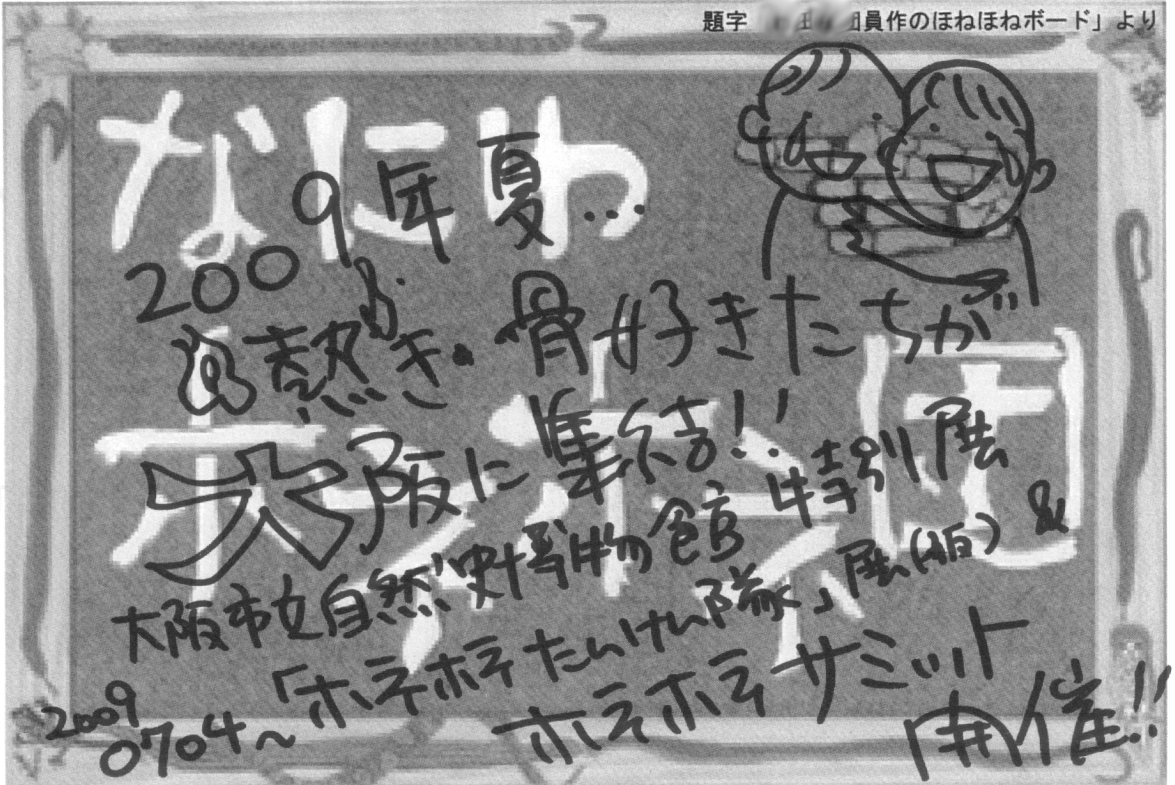


題字 正 「員作のほねほねボード」より



ホネホネ骨サミット
2009 (仮題)
ほねほね骨好き!

2009年の夏に骨サミット (仮題) を開催します。日本全国から (世界から?)、骨格標本を作っているサークル/団体が集まるイベントです。それぞれが作った標本を持ち寄って展示したり、活動内容を紹介したり、皮剥きや骨取り技術の交換をしたりしたいと思います。講演会とか、皮剥きイベントとかも楽しそう。

◆日程：2009年8月22-23日
◆会場：大阪市立自然史博物館
◆主催：なにわホネホネ団、大阪市立自然史博物館

◆招待講演 & 来賓
■相川稔 (あいかわ・みのる) 氏：ポーフム市立標本作製技術職業専門学校卒業後、ヘッセン州立ヴィースバーデン博物館自然史部に所属。現在日本に帰国中。

■Jan Panniger (ヤン・パニガ) 氏：ポーフム市立標本作製技術職業専門学校卒業後、シユトゥ

ツトガルト自然史博物館に標本作製技師として勤務。専門は鳥類学。

◆参加費・出展料：無料 (しかし、参加は自費です。遠方のみなまませひ今年の夏に向けて、貯金を)

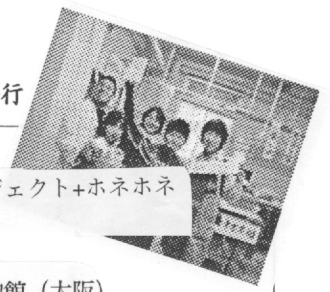
◆同時開催
大阪市立自然史博物館特別展「骨の動物園 (仮題)」
「骨の動物園 (仮題)」
ホネホネ探検隊 (仮題)
(7/8月)

★参加者募集
骨サミットに出展する団体や個人を募集します。対象は、骨格標本を中心に脊椎動物の標本作りの活動をしている団体や個人です。

★協賛募集
このイベントを応援していただきそうな企業・団体に心当たりがある方は、案内状をお送りしたいので、担当者のお名前、ご連絡先などご紹介ください。
(事務局長 和田岳)

決まりきった...
ホネホネサミットは「花王」の「ミニ」シリーズの「骨」がテーマです。

ホネホネサミットは「花王」の「ミニ」シリーズの「骨」がテーマです。



今年もGET! 花王助成金

助成番号 08-2-06 → 08-2-06
 プロジェクト名 ホネホネ出前プロジェクト+ホネホネサミット2009!
 助成額 50万円
 拠点ミュージアム名 大阪市立自然史博物館 (大阪)

この団体は、大阪市立自然史博物館を拠点とするボランティア・サークルで、博物館に冷凍保存されている動物遺体から骨格標本を作製し、博物館に納めたり、科学系イベントなどへの参加を通じて普及活動を行っている。

助成1年目は、全身骨格標本を共同作業で組み立てたり、組み立て作業のノウハウを冊子にまとめて発行した。また完成標本やパネルなどは、科学系イベントなどでも展示した。さらには動物由来感染症専門の獣医師を招いた勉強会を実施するなど、当初計画以上の取り組みもあり、大変活発な展開を見せた。

2年目では、骨格標本の製作を続けつつ、完成した標本を「ホネホネ出前セット」としてイベントへ持ち込んだり、要請があれば小学校などでの出前展示や授業も行う。さらには、動物骨格の専門家や骨格標本作製技師を講師に招く公開シンポジウム「ホネホネサミット」(2009年夏予定)を開催し、参加者の専門性と技術を高めるとともに、各地のグループとの交流の場づくりにも取り組む。

この団体には多様な世代のメンバーが参加しており、専門家の協力を得ながら知的好奇心を満たしつつ、いかにも楽しそうに元気に活動する様子が伝わってくる。科学系イベントや研究会などで積極的にその活動と成果を発表していく姿勢も高く評価した。2年目も楽しみである。

恒例の取材記録

今回はいつになく少なめ。

- BE-Pal (すみません、どの号かわかりません…)
- 子どもの科学 2009年3月号 「動物の死体を活かせ! 骨格標本づくり」

「なぜか掲載が回らない」
 「なぜか掲載が回らない」
 「なぜか掲載が回らない」



● 団員から広告!



なにわホネホネ団オリジナルグッズ

通信販売開始いたしました。

Tシャツ、マグカップ、パーカー、マグ、タオルなどなど。
 団長によるホネイラストでお送りしております。
 ここでしか手に入らないホネ・グッズはいかが?

<http://www.upsold.com/imshop/app/d/hone2/>

* 売り上げの全額が「なにわホネホネ団」に寄付され、活動に役立てられます。

ホネホネ団通信 遠征報告

花王の助成金で岸和田と四日市に行ってきました。

きしわだ自然資料館
2月15日

場所は岸和田自然資料館1F広さ40畳程の催事場、老若男女入り混じった、約30名の参加者。どのような催しになろうかとドキドキしていましたが、さすがは我が団長の一般人ホネホネ化プログラムと、質の良い豊富なホネ神様資料の後押しによって

- 第一部 ホネホネクイズから活発な発言があり、
 - 第二部 ナウマンゾウの骨を見て、つながりを勉強。
 - 第三部 鹿ホネ並べ大会では驚く程積極的の手に手にホネ神様の一部を持ち、頭をひねってこの難関にチャレンジして下さいました。そしてみんなで骨の型取を行いました。
- 功績としてはどうでしょう、ホネ



本の売り上げも悪くなかったようですし、終了間際、参加者の一人、小学生の女の子が百数十本ある「オスターション」の肋骨を数えてくれると言ふ一事でもホネホネ嗜好が充分に浸透したと言ひ得るのではないのでしょうか？また、何よりの功績として、参加者のみならず、主催者側も残らず楽しめた事を追記したい(と、勝手に書いたけど、みんな楽しかったよね?)
今回ワークショップ開催にあたり、雑務に会場設営と奔走して下さいました岸和田自然資料館のみなさま、豊富な知識で楽しくマニアックなお話して下さいました益富地学会館のみなさま、本場にありがとうございました。

三重県四日市 市立中央小学校
2月24日
「動物のからだのふしぎー骨からみえる暮らしと工夫ー」
組み立てた骨格標本を担いで、出前授業に行ってきました。動物のかたちのおもしろさは、暮らすための工夫でできている...というお話。スクリーンの裏から、影絵のように骨を映して、クイズで当ててもらいました。給食の献立表を見ながら、生きるために食べる動物である私たち人間のことについても話してきました。
ついでに、オスターションの骨を大げな
三重県四日市 市立図書館
2月25日
昨年発売されて話題を呼んだ「ホネホネたんけんたい」、監修の団長と編集の松田素子さんが絵本作りのきっかけや経緯をおしゃべりしながら、実際の骨格標本を眺めて、この絵本をもっともっと楽しむための「骨をみるコツ」について紹介。

予告!
山口県岩国市 岩国科学センター
3月20日
* 岩国市の教員と小学生対象 (申し込みは締め切りました)
「手羽先の骨格標本をつくらう」
身近な素材で鳥の翼の骨格標本をつくってみます。手羽先はニワトリの翼です。また、翼は、鳥の変化した前足でもあります。鳥だけでなく、哺乳類や虫類などのさまざまな骨格標本を見ながら、脊椎動物の手足がどう変化したのか、その違いも観察します。さて、どんな反応が見られるかな?
(団長 澤 桐子)

現在37歳の男性がククリワナ猟師になつたいきさつを書いた一冊。ククリワナでイノシシ猟と聞いて思ったのが、「団長と同じ……」

第一部が自分の生い立ちと、どうして猟師になろうと思ったか。1970年代に伊丹市という都会で育っているながら、薪で風呂をたいていたというから、かなり珍しい生い立ちである。

第二部以降が獲物の捕り方、料理の仕方など、現在の猟生活。猟師と



ほね本紹介

「ほくは猟師になった」

千松 信也 (著)

1600円+税

リトルモア

ISBN 978-4-89815-244-7



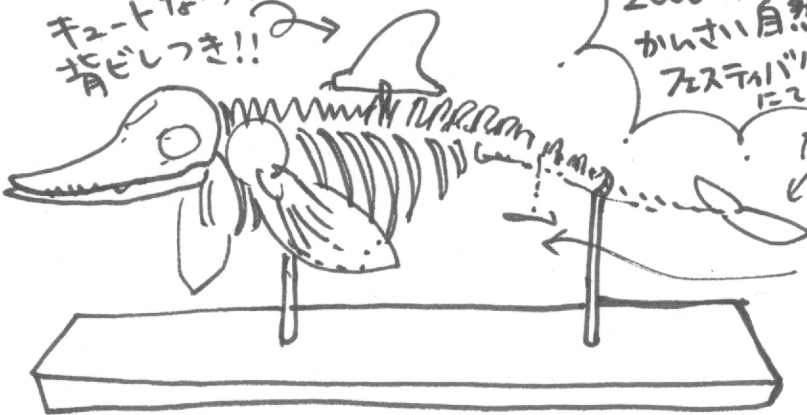
いうと一世代前のおじいちゃんの鉄砲打ちなイメージが普通だと思いが、若くてしかもククリワナでイノシシを狙ったり、網でスズメを捕る猟師というのは珍しい。ビール片手にスズメが来るのをじっと待ち、紐を引っ張って、パタンと網を閉じると一網打尽、というのはなんとも楽しいな猟である。

ホネホネ団もびっくりな皮剥ぎ技術をもっているらしく、十分でシカの皮が剥けるそうだ。

京都府内の山際に住み、裏山でイノシシを狩り、しかも普段は運送業者。

ぜひお近づきになりたい。そして猟を見せてもらいたい。

花王のミニテラミュージウム 70g 2008年2月
 ついに完成 おひろめ!!
 キュートな3ケル 背ビレつき!!



全長 230cm

ついに完成しました。①
 本にホネホネ団で組み立てた
 最大の標本です。
 子田かい計測値をもとに、

バラバラだった骨を並べれば
 悩み、くつは外し……
 樽野コモンの指導のもと、
 イルカ4-42 が「いざり」ました。

ハセイルカ 大阪
 組み立て完成!

超合厚
 イルカ
 コモリ
 マニアル
 準備中。

2008年8月～2009年2月の成果品

- 2009年2月21日：タヌキ5体の皮剥き。テン1体の骨のカリカリ。(0 府立大学の獣医の卵の集団のリクエストによるスペシャルな日。獣医の卵はタヌキを剥きたいものらしい。大学で犬を解剖したりしないんだらうか?)
- 2月14日：イタチ1体、タヌキ1体、キツネ1体、テン1体の皮剥き。アライグマ2体の骨格標本作成。イタチ30体位の皮の脂肪除去。いろんな骨のカリカリ。(イタチの皮の処理は夕方から本格化。多くの人を巻き込んで、なんとかすべて処理できました～。)
- 1月6日：イタチ1体、ウサギ2体の皮剥き。タヌキ2体、イヌ2体、アライグマ1体の肉取り。イタチ24体の皮の脂肪除去。(大阪府産の哺乳類の処理に明け暮れた感じ。)
- 2008年12月23日：タヌキ1体の皮剥き。ネコ1体、アライグマ2体の肉取り。ニホンジカの骨洗い。アカウミガメ2体を埋める。(人があまりいないのでゆったりと作業。というか、普通に標本の受け入れ作業をしました。丸一日かかりました。)
- 12月20日：ゴイサギ1体の皮剥き。タヌキ4体、ネコ1体、アライグマ1体、ヌートリア1体の皮剥き・肉取り。ネコ1体、アライグマ1体、タヌキ2体、ニホンジカ1体の肉取り。タヌキ1体の皮の脂肪除去。ニホンジカの皮の白なめし処理。(熊本から客人が来たので鳥の皮剥き。あとは冷凍庫を空けるべく皮剥き。)
- 11月23日：ポスターを貼った。(東京で開かれたサイエンスアゴラに出展。)
タヌキ2体、スナメリ1体の皮剥き・肉取り。タヌキ5体、キツネ1体、アライグマ1体、ニホンジカ2体、イノシシ2体、ヤギ1体、ダマシカ1体、シロクマ1体の骨洗い。(骨洗いとスナメリの日。午後からは外でスナメリで盛り上がっていたらしい。)
- 11月15-16日：ハセイルカなどの骨格標本を展示。団長本などを販売。(地元のかんさい自然フェスタに出展。)
- 10月25日：タヌキ3体、アライグマ1体、ヌートリア体、ニホンジカ2体の皮剥き・肉取り。(めずらしく団長、副団長、事務局長がそろった!)
- 9月15日：タヌキ5体、コアラ1体、ヒメハリテンレック1体、エジプトルーセットオオコウモリ1体、マカロニペンギン1体の皮剥き・肉取り。フタユビナマケモノ1体、タヌキ1体、ベンガルヤマネコ1体、ヒョウ1体の肉取り。ニホンジカ1体の骨洗い。(コアラとナマケモノの日。でも以外とペンギンも盛り上がっていた。)
- 8月31日：タヌキ2体、キツネ1体、カリフォルニアアシカ1体の皮剥き・肉取り。イノシシ1体、ゴールデンキャット1体の肉取り。パーバリーシープ1体、タヌキ1体、マガモ1体、オシドリ1体、ミコアイサ1体、フクロウ1体、ゴイサギ1体、コサギ1体、カワウ1体の骨洗い。(見学者の中にドイツでちゃんと標本作成を習ってきた人が…。ぜひ入団してもらって色々教えてもらうことに。)

アライグマ

解剖レポート

中学二年生の二学期には『動物』と言う単元がある。せきつい動物についてざざっと分類や体のしくみの勉強をする。現行の教科書では進化についてはふれていない（来年あたりからちよっぴりだけ進化にもふれるみたい）。そして、この単元を学習する時、きまって生徒の誰かが発言するのだ。

「解剖はしないの？」

「したい？」と聞くと、えええ？！という反響と共に半数ぐらいが興味を示す。例年ならここで、昨今の事情やら動物愛護やらをいろいろ説明して授業では解剖はしないとつけて終わるのだが、今年は生徒の反応が良い。魚か鳥を仕入れてきて、放課後希望者だけで特別講習してもいいかな・・・できれば哺乳類がわかりやすくいいのだけれど・・・と思っていた矢先、ホネのメールが舞い込んだ。「アライグマ、いりませんか？」博物館ではアライグマは多数標本があるので、アライグマの死体を希望者に譲ってもらえるという。これだ！

いままで、活動にもあまり参加できずメールだけを楽しむ幽霊団員と化していたのだがさっそくホネメールに投稿だ。ほかに希望者がいたのにもかかわらず、教育目的と言う錦の御旗を掲げて横取りし、月曜日の晩、博物館までアライグマを受け取りにうかがった。決行は火曜日の放課後、テスト前なのでクラブ活動はない。40人ほどが理科室に集まった。日本でのアライグマの置かれていた現状を簡単に説明し、もったいつけて準備室から出してくる。ビニールを空けた瞬間広がる異臭。「ぎゃー！」「おおお・・・」「うわあ」さまざまな歓声が上がります。動物を飼ったことのない子も多い。じっくり見ることもないだろう。ましてや、アライグマ、ましてや死体、である。とりあえず、毛をむいて内臓をざざっと見せる予定だったが、実はこの時点ではまだ溶けきっておらず、カチンコチンだった。むむむ・・・予想以上に溶けるのが遅い・・・。火曜日は外見観察と体長測定で終えて、本番は翌日水曜日に延期した。ロコミでさらに集まり50人強の生徒がらんらんと見つめる。内臓等を効率よく見せたかったので、皮むきはせず、お

なかを開いた。最初にメスを入れるとき緊張感と共に熱い視線が突き刺さる。一つの机に50人が押し合いへし合い・・・狭い。内臓を取り出しながら見せると、男子はギャーギャー。まず、血のどす黒い赤い色に男の子はやられるみたい。手袋を着用させて触らせると、意外な弾力におどろいている様子。やっぱり本物はいい。理科部員と女子たちは冷静に、興味深そうに見ていました。「皮をむきたい人、腸を切り開きたい強兵いる？」と聞くと、手を上げたのはやはり理科部員。理科好きは一般生徒とは少し違うというところが、明らかに変わった感じ。ホネホネ団に入団も出来そうだ。腸の長さははかたり、心臓を開いて筋肉の厚さを比べたり、ひとつおりに見せて、一時間ほどで下校時間となる。その後30分くらいは理科部生徒が残って、内臓を観察したり皮むき（やはり尻尾に興味あるみたい。かわいいから。）したりして、本日終了。家庭用のちいさな冷凍庫になんとかぎゅうとつめれる大きさになったので、安心。このあとは、理科部にも協力してもらって今年度中に組み立て標本まで出来たらな。肺にストローを刺して膨らますことをやらなかったのをあとで思い出して反

省。あれを見せてあげると、肺の印象が強烈になったのに・・・ごめんなさい。一応全員に簡単なレポートを提出させた。いろいろな感想があったが、一つの命と向かい合う貴重な経験になったことは間違いない。次回（きちんと事前学習もして、その動物の背景とか（アライグマなら現在日本における野生化の問題とかも含めて）内臓の見るポイントとか先に考えさせてから取り組もうと思う。見るだけではなく、実際に自分たちの手で解剖させてあげたいとも思う。演示ではあるけれども、解剖を見せてあげるものが出来てよかった。ほんとうにホネホネ団に感謝です。ちなみに、このあと、学校内で死んでいる動物がチヨコチヨコとあつまるようになりまし。朝、職員室の机の上にとつと小鳥が置いてあったりもする。知らない人が見たら、かなり強烈ないじめの構図だと思われるよなあ。生徒の一人が近寄ってきて「先生、うちのハムスターが死んだらあげますね」。かくして理科室の冷凍庫には小鳥やハムスターの死体が解剖されるのを今か今かと待っている。

田中 子 (理科教員)

死体探集エピソード

団員たちの苦勞がにじみ出た死体回収にまつわる逸話を、団員が集めてくれました。

会社の山仲間と北八ヶ岳の蓼科山く双子山へ山歩きに行ったときのこと。双子池ヒュッテを出たところの林道で、ふと足元に目をやると、動物の死体が転がっている。お、ヤッター！野ネズミか？と思つてよく見ると…おおおお……ッ オコジョだあああ……いっぺんにテンション100%跳ね上がった。比較的新しかったので大丈夫だろうと早速ハンカチに包んでビニール袋に収納。昼前頃に寄ったサーブスエリアで保冷材を買つて一緒に包む。まあ、車に轢かれたらしく、目玉が飛び出していて頭骨も壊れている可能性はあるものの、それでもオコジョはオコジョ。たとえ死体でも間近で見るとは初めてだ。いやあ、これは今回の山行で最高の収穫である。一応会社の山仲間は、僕がこういう人間であるということは知っている。(団員 H. M.)

仕事の車で走っている最中に、和

歌山市内で、車にひかれてお亡くなりになっている(ネコ、タヌキ、ドバト、キジバト、カラス、アカミミガメ)を発見し、場所を覚えておいて仕事が終わってから回収に向かうことが多いです。(行つたら、すでになかったことも……) 会社の車なので仕事での回収は、あのおいがかが車に残るのも困るし、同乗者にどんびきされると思うのでしてません。ちなみに同乗者は眼が御不自由な方が多い(鍼灸・マッサージ師さん)ため、遺体の確認はされていません。話している面白がつてくださった方がいらつしやいましたので、「アカミミガメが道のど真ん中でつぶれてるの拾つてきていいですか？」って聞いたら「やめてください」といわれました。(団員 N. Y.)

うちの近所で大きな猫が死んでいました。車にはねられたようだ。幸い、周りに人はいない。何気なく近付いて、何気なく猫を拾い、そのまま何気なく家へ入る。そしてそれを持ってある日、会社に出勤。ロッカーにしまいこむ。仕事が終わつてネコをかばんに入れて博物館へ。冬だったので、誰にも気づかれることは無かった。(団員 H. M.)

岸和田の駅前である冬の日、ピツクアップしてくれる友人の車を待つていました。すると目の前の植え込みの影に白黒のにゃんこが。少し鼻血を出している程度で、きれいなご遺体。拾いたい……しかし現場は朝の通勤時間帯にあつており、ひっきりなしに車や人が通る。そこで、いかにもそのにゃんこがご存命であるようなふりをして近づき、抱き上げて、「おーおーおー、今日は寒いよねええ」などと語りかけながら、硬直したご遺体の様子が分からないように、ゆりかごのごとく優しくあやしつづけた。無論、友人の車にも、あやししながら乗り込んだ。「んー何その猫……ギャー！」(団員 N.)

会社の工場で、後輩が「Mさん、排水溝でカモが死んでるけど、どうする？」と教えてくれた。勤務中にもかかわらず、拾いに行く、ところを先輩に見付かる。「お前、そんなもんよう拾うなあ。気色悪い」といいながらいやそーな顔をする先輩。「いや、こういうのは貴重ですから」といいながら、番線でフックを作つてカモを引き上げ、レジ袋にいれ、そそくさとロッカールームへ。幸い誰にも見付からず、自分のロッカーにしまい込み、

終業を待つ。そして、何くわに顔をして、カモを鞆に入れ、そのままバス、電車を乗り継ぎ、博物館へ。(団員 H. M.)

会社に出勤して、更衣室の玄関前でヒヨドリが落ちていたのですが、私の前後にも人がいたので、何気なく何かゴミでも拾うようさつと拾い上げ、何事も無いような顔してそのままロッカー室へ。別にあとでも何も言われなかったので、おそらく誰も気づいていなかったはず。(団員 H. M.)

江坂公園で2羽のカラスがドバトを食べていた。幸い連れがいなかったの骨はもらおうと、公園で遊ぶ子供やママたちの視線がはずれてそうなタイミングでささつとビニール袋に回収。カラスから横取り気味。(団員 N. M.)

朝出勤すると、警備員さんが、「出勤途中に杭全の交差点の南でタヌキが死んでいるのを見ましたよ」とのこと。すぐにポリ袋をひつつかみ、自転車をとばしました。現場に着いてみると、なんとパトカーが止まつており、お巡りさ2人がタヌキを回収していました。すぐに、「それ標本にするので下さい」と言つたところ、二人は顔を

見合わせて何かぼそぼそ。やがて「では暑まで来て下さい」。しょうがないので、東住吉警察まで行き、そこで、しばらく待たされた後もらってきました。タヌキの死体は拾得物ではなくてゴミ扱いだと思うので、すぐにくれてもいいのになと思つた次第です。(顧問T)

自分で見つけて拾ってくるというのでなく、誰かが見つけたのを「それちようだい」といつてもらおう場合、とにかく恥ずかしいと思わず、堂々と申し出ること。(顧問T)

淀川の海老江干潟で某会の探鳥会があつたのですが、そのとき、干潟に何か黒いものがあつたんです。もしや、と思つて近付くと、案の定、オオバンの死体。このときは袋が無かつたので、参加していた人たちに「誰かレジ袋持つてませんか」と声かけまくつて、2、3枚めぐんでもらい、無事收容。さらにもう一羽、ホシハジロの死体も発見。2羽をリュックに入れて観察会を続行。まとめのときに早速披露して、普段なら双眼鏡かスコープの向こうでしか見れない鳥を、目の前で見てもらうことが出来ました。かなり腐乱してたのですが、特徴はほとんど残つていたので、じっくり観察してもらえ

ました。(団員H、M)

近木川河口で子猫の水死体を拾い、例のごとくビニール袋に入れ、リュックにしまった。(団員H、M)

堺泉北港のナガスクジラ。博物館の外に展示しているやつです。朝刊の隅に乗っていた、「堺泉北港に巨大クジラ」という記事を見て、「ほしいんですけど」と大阪府港湾局に電話しました。ネイチャー・スタディに書いたので、それを参照して下さい。(顧問T)

ほとんどの死体は、自宅の猫たちが狩ってきます。3匹の猫は分担(得意分野)があり、タツマキくんはねずみ系、パスカルはかなへび、じねずみ、ひみず、ロンド早は鳥です。ですから、死体回収は我が家のリビングです。いちど、寝室にご遺体があつた時には閉口しましたが、そのとき確かに実習室の香りがしていました。その遺体の数々はとつても小さいので、すぐに冷凍庫に入れますが、まとめてから、博物館に送ろうと思つていて忘れてしまい、冷凍庫の中はぎゅうぎゅうになり、殆ど食料は入らない状態です。あと、最近ロンドは鳥を食べてしまうの

ですが、必ず、肝臓はのこしています。なぜ?住んでる場所柄大きな死体にも出会います。のうさぎ、いたち、あらいぐま、たぬき、リス、ねこ、へび、もぐら、などは、いったん確認して、「ゴミ袋など持たない場合はすぐに自宅に戻り、ビニテや、袋を持参し博物館に送るようにしています。最近、近所の郵便局から送ることが多く、窓口の人が、また、標本ね!と言つてくださいます。でも、狭い近所づきあいですから、家の動物拾いはじわじわと広まつていて、標本死体と気づかれないか、どきどきしているのが本音です。息子の小学校の担任の先生も、通勤途中に遺体を見つけると必ず学校からFAXをくださいます。生きている動物も拾うと、勘違いされて、「アライグマがわなにかかつているよ」とうちに連絡くださる親切な近所の方もいます。(団員R、O)

回収に便利ということでは、少し大きなものであればやはりポリ袋ですが、あらかじめ新聞紙でくるんでからポリ袋に入れるのがおすすめです。爪など突起部で袋が破れるのを防げます。(顧問T)

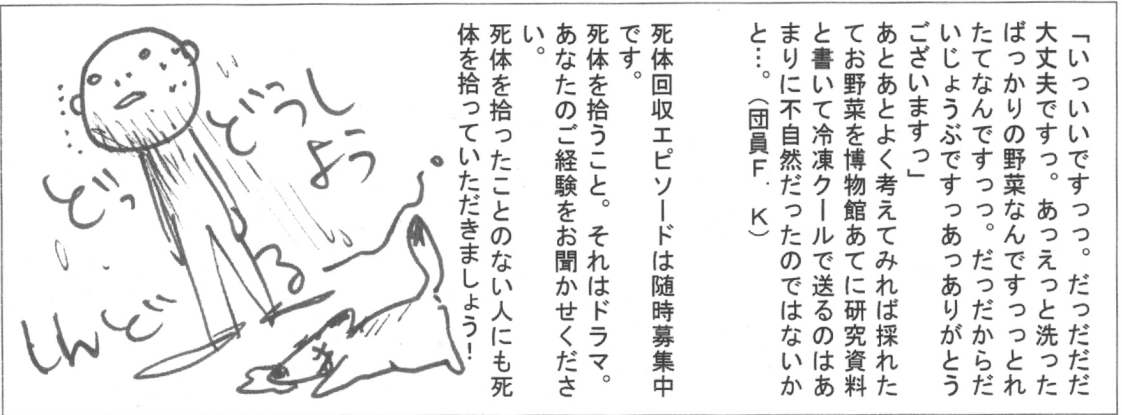
私の住んでいるのは奈良県の山奥

の小さな村です。しかし宅急便の集配所は割と近くにありますが。必然、ホネ神様が降臨なされた場合はすべて一度ホネ巫女のおうちでこん包し、その集配所から天国へ。もとい博物館へ送られることになりませぬ。小さな村ですからもちろん集配所で働いておられる職員の方もそう多くはありません。次から次へ、せつせつとご遺体を運ぶうちにいつの間にか職員の方の顔を覚えてしまうようになり、どうやら職員の方も「自然史博物館あてに着払い冷凍クールで段ボールを送る女子中学生」の存在に気づいてしまわれたようです。とうとうある日、ご遺体入りの段ボール箱を抱えて集配所の扉をあけると。。。

「冷凍クールでよろしいですよね?」「あつはい。……………あれ?完璧に顔を覚えられてしまったようでした…。」

またある日は、見かけない職員さんで、どうやらバイトさんのようでした。当然の如くご遺体入りの段ボールを抱えて集配所に行ったのですが、

「これ…。段ボールの底濡れてるんですけど中のもの大丈夫ですか?開けて見てみましょうか?もしかしたら何か壊れてたりするかもですし。」

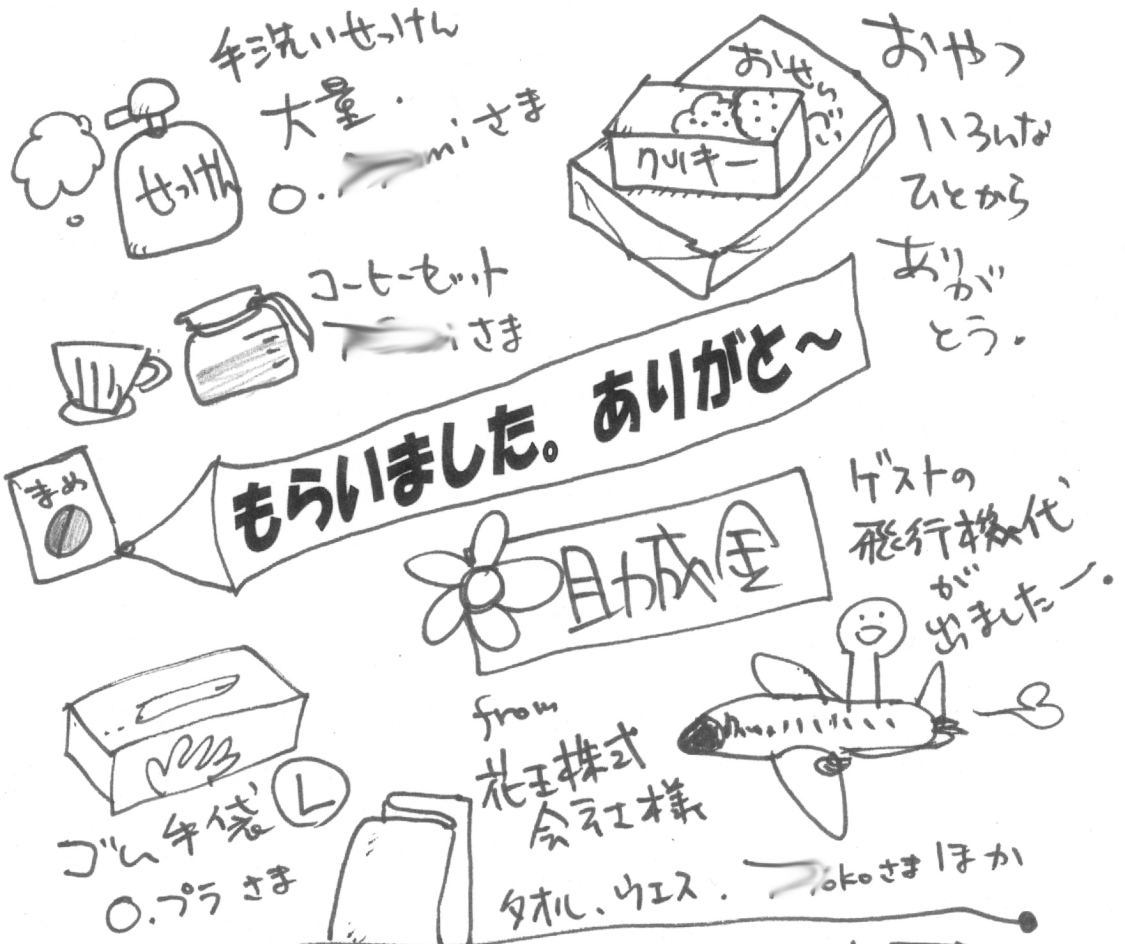


「いいいいですっ。だっただだ大丈夫ですっ。あっえっ洗ったばかりの野菜なんですっ。だっだからいいですよっ。あっありがとうございませう」

あとあとよく考えてみれば採れたてお野菜を博物館あてに研究資料と書いて冷凍クールで送るのはあまりに不自然だったのではないかと...。(団員F.K)

死体回収工ピソードは随時募集中です。

死体を拾うこと。それはドラマ。あなたのご経験をお聞かせください。



もらいました。ありがとう~

目録

お待ちしています



お返し (大歓迎)

洗剤 (洗たく)

クッキー (クッキー)

おやつ (おやつ)

死体 (死体)

人 (人)

手 (手)

いろいろ (いろいろ)

みずば (みずば)

グミ (グミ)

プラ (プラ)

花 (花)

花王 (花王)

タミヤ (タミヤ)

ウエス (ウエス)

ホコ (ホコ)

教師など、必ずしも生き物に携わっているとは限らない。共通点は標本作りが好きで、動物が好きということだ。入団資格は「タヌキを一人で一頭さばけること」。この条件は大人も子どもも同じである。

各自が死体に向き合い、実際にメスを使って作業することで、体の仕組みが見えてくる。筋肉の走り、腱のつながり、関節の動きなどを知り、怪我の様子から死因を推理し、胃内容から食性を知る。メスを持つことで、刃物の使い方も学べる。時には「出張ホネホネ団・皮剥き屋台」と称して科学系のイベントで解剖の実演をすることもあるが、意外にも屋台を見に来るのはまずは子ども、次がお母さんである。どうやら男性は血みどろに弱いらしい。

さて、約5年間の活動で実感したことは、隠れ骨ファンがけっこう多いことである。出張屋台でも人気があるし、九州や東京などの遠方からわざわざ見学や実習に来る人もいる。にもかかわらず、まだ解剖、標本づくりには偏見や誤解が多く、大学や小さな博物館の現場では乏しい文献や資料から手探りで標本作りを行っている状態だ。

そこで、2009年8月22～23日に、大阪市立自然史博物館で「ホネホネサミット2009」を開催することになった。これは隠れ骨ファンを発掘し、情報や技術を交換し、地下組織的に活動している各地のサークルの交流の場とすることが目的だ。他にはない一風変わったサミットになること間違いなし。皆様ぜひご参加ください。

なにわホネホネ団からのお願い

死体は重要な標本です。ぜひ回収して博物館まで届けてください。届けるときにはビニール袋で3重ぐらいにくるんでください。直接持ち込むほか、クール宅急便の冷凍も利用できます。着払いでも結構です。その際、内容は「標本」「サンプル」とお書き下さい。

送ったら下記まで連絡をください。標本の採集日、採集場所（地図のコピーに印でOK）、採集者の名前のメモをお忘れなく！

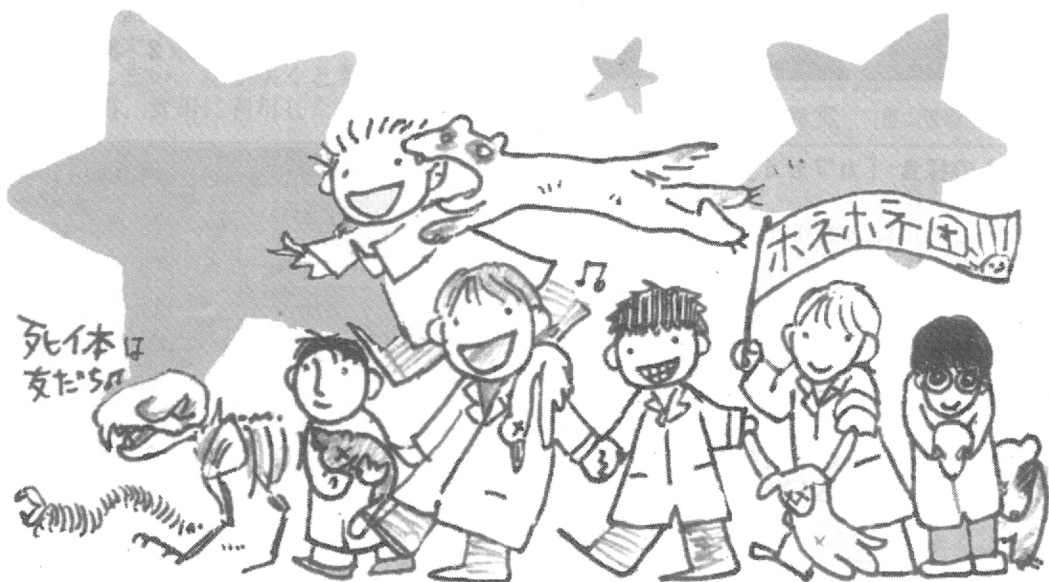
お問合せ先

大阪市立自然史博物館：

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/>

動物研究室 和田岳学芸員：

wadat@mus-nh.city.osaka.jp



標本の価値

～なにわホネホネ団 5年間の活動から

高田 みちよ・西澤 真樹子

もし、運転中に死んだタヌキを見つけたら？
①通り過ぎる、②道の脇に寄せる、③埋める、
④保健所に通報する。なにわホネホネ団ではもちろん、⑤拾う、だ。

団員の車には、ゴミ袋にガムテープ、ダンボール、新聞紙などが常備されている。そんなものを拾ってどうするのか？博物館へ持ち込み、標本化するのである。



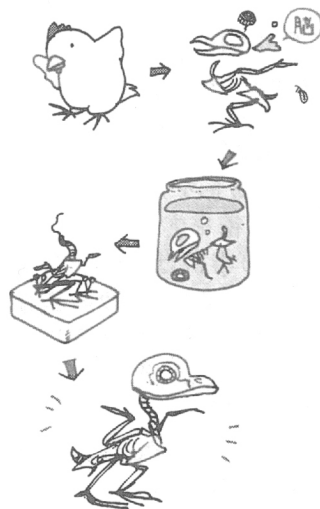
自然系の博物館に標本は欠かせない。標本とはすなわち生物の死体である。植物標本は植物の乾燥死体。昆虫標本ももちろん昆虫の乾燥死体。博物館で収集しているのは死体だ、と言っても過言ではない。哺乳類や鳥類だって例外ではなく、集めるのは死体だ。ただ、植物や昆虫は生きているものを集めるのが普通だが、哺乳類では死んだものを集めるほうが普通なので、道路で轢かれたタヌキはりっぱな資料として収集され、博物館で処理され、登録され、標本となり、收藏される。この作業は一般的には学芸員の仕事と言われているが、それを「みんなで楽しむサークル活動」にしたのが、大阪市立自然史博物館を拠点に活動するなにわホネホネ団だ。

なにわホネホネ団は2003年の夏に誕生。宝塚ファミリーランドの閉園によって寄贈され

た数々の骨格標本や剥製の搬入作業をした団長が、骨に夢中になったことがきっかけだ。自然史博物館でも標本としてすでに多くの死体が冷凍保存されており、これらを全身骨格や毛皮、仮剥製に作成する必要があった。この作業を「楽しむ」サークルとして、始めは5人ぐらいからスタートした。標本作りは死体との向き合いだ。それも死んでころがっている死体を拾ってくるのだから、腐っていたり、ウジが湧いていたり。館内に臭いが広がることもあるため、主に夜間、なんとなく地下組織的な雰囲気で行っていた。

ところが、2004年春に開催された博物館の文化祭「大阪自然史フェスティバル」に毛皮や骨を出展したところ、子どもたちに大受け。お気に入りブース第2位の栄光に輝いた。それ以降、(株)INAXのギャラリーで行われた「小さな骨の動物園」に出展、新聞や雑誌の掲載などにより、どんどんメジャーになり、今では団員は


100名を越えている。年齢構成も6歳から60代までさまざまだが、10代の子もたちと若い女性が多い。職業も獣医や生物関係だけでなく、デザイナー、主婦、図書館司書、



自己紹介!

団員現在


130名くらい
とんぱん
とんぱん
とんぱん

No.85 津子 


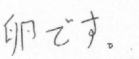
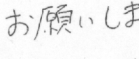
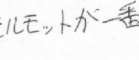
MBのラジオで「ほねほね団」というラジオ
局に1回、検索したところ
以前に保護したトトのことで
メール質問させていただいた先生の
HPに辿りつきました。
鳥フェスに行き、
鳥のかぶりものしていた(たぶん和田さんです)
人がとてもユーモラスに思い、入団を決意。
今は作業している。その空間がとて好き。
家には金魚の剥製、キン太がいます。

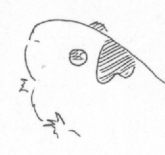
長くはまりました。遅くはまりました。
入らなかつたらどうか適当に
省いてください。
よろしくお願いします。

ニこまで
入らなかつたら
とる

No.111の下子  子です。
現在、兵庫県から奈良の大学に通っています。
念願かなって、ようやく団員になることが
できました！いろいろな骨太たちと出会って
いきたいです。よろしくお願いします。



No.114    
獣医の卵です。
よろしくお願いします。
動物は、モルモットが一番好きです。



上   20才 

高校時代からちょこ顔を出してましたが
本日ようやく入団!? とろろ宣しく願います。
普段の休日はミュージアムショップに
いてるので、こちらも宣しく!!

編集後記
12月の芥川ミズヒマワリ駆除
の時に保護されたカヤチユウは、2
匹が死んで1匹が生き残っています。
。。。なんで死んだかというと、
。。。共食い。。。初めの1匹はたん
ぱく質を入れ忘れてたからかな。次
の1匹もエサが切れてたからみた
い。たった1晩ぐらいエサが切れた
からって、我慢しろよ!と言いたい。
しかも脳と目と内臓だけ食べて、筋
肉は食べ残すとは。。。完食してやれ
よ!
ご遺体は液浸になりました。
御了承下さい
ホネホネ団通信では、作成の手
間を省くため原稿の校正を通信係
が勝手にしています。大幅変更は
投稿者に確認しますが、内容が変
わらない程度であれば通知しませ
んのので御了承ください。
(通信係 田中(よ))